

他大学・高等専門学校出身学生の適応に関する予備的考察

—学生相談事例の分析から—

A Preliminary Study about the Adaptation of the University Students
Who Entered with the Transfer from the Other Universities or Technical Colleges

相澤直子*
Naoko AIZAWA

尾崎啓子**
Keiko OZAKI

1. はじめに (目的)

学生相談の場では、他大学や高等専門学校出身の学生(以下、両方合わせて他校出身学生と記す)に出会うことがある。実数としてさほど多くないにもかかわらず、彼らの訴えには独特の印象があり、記憶に残っている事例が多いように感じる。

文部科学省の学校基本調査(2016)では、学部への編入学者数は、平成12年度をピークに減少しているが、これは短期大学の学生数の減少およびそこからの編入学者数の減少に因るところが大きく、高等専門学校(以下、高専)からの編入学者数は約2,500人で、ほぼ横ばいで推移している。

杉野ら(1985)は、高専から大学に編入学した者に対し、編入学の理由・編入学制度(入試や認定単位等)についての意見・編入学後の状況(カリキュラムや既修内容とのマッチング等)をアンケート調査し、編入学の希望動機としては、「より高度な専門的知識を得たい」等の積極的姿勢が目立ったとしている。富山(1996)は、自身の体験から、高専側の編入学希望者への進学サポートの必要性を述べている。北村(1990)は、高専からの編入学生に、一般教養や基礎科目を履修する制度を、また堤ら(2008)は、研究室受け入れ後の入門学習として、e-Learningを用いることの有効性をそれぞれ報告している。植村(2003)は、編入学生の全般的な適応状態や対人関係(特に在来学生との交流)について、面接調査を実施し、編入学生のほとんどが編入学して良かったと回答しているが、カリキュラムに対する不満や、交流が編入学生同士に限定される傾向がうかがわれたとしている。

しかし、これらの大学・大学院の他大学出身者の実態に関する調査や報告は、小中高の転校生のそれと比べるときわめて少ない。小中高の転校生は、以前から文学や映画のテーマにもなっており、転校生に関する研究も多い。また近年は、在日外国人や帰国子女等、異文化や母語が日本語以外の言語である児童生徒や、災害によって転校を余儀なくされたケース等の問題を扱った研究も見られる。

小中高の転校の場合は、本人の意思によらず、家族の

都合ややむを得ない事情によるものがほとんどである。

それに対し、大学・大学院への編入・転入は、基本的には本人の意思による。彼らへの注目の少なさは、実数が少ないことに加え、自ら入りたくて入ってきたのだから、新しい環境に適応するよう、自己責任・自助努力でがんばるべきという発想が、受け入れ側にあるのかもしれない。

このような他校出身学生の抱える適応上の問題は、どこの大学・大学院にも在籍しているが、その存在や困っていることに気付かれにくい、留学生・帰国子女・社会人入学・障害学生・性的マイノリティ等の“マイノリティ”の学生の問題にもつながるものと考えられる。

本稿は、筆者らが担当した事例データから、他校出身学生の適応・不適応の状況を把握し、今後の支援のための仮説を提言することを目的とした予備的研究である。

2. 方法

A大学の学生相談部署に訪れた他校出身学生(留学生、社会人入学、コンサルテーションのみで詳細不明のものを除く)の内、X年度からX+10年度までに筆者らが主担当としてカウンセリングした事例(他のカウンセラーが不在の時に臨時的に対応したものや、インタークのみで他のカウンセラーに引き継いだものは除く)を対象とする。再受験して学部1年生として入学したものや日本の学校を経由している外国籍のものは除いた。

心理カウンセリングを担当する学生相談部署(常勤3人、非常勤4~5人)への来談者の実数は年間約400人超。筆者らは非常勤カウンセラーとして、メインキャンパスにて週あたり2人合わせて2.5日勤務している。

なおA大学は、首都圏にある理系中心の大学・大学院であり、学生総数は約10,000人。学部生の9割が大学院に進学し、ハイレベルな研究機関として留学生や研究員の受け入れも盛んである。他校出身学生の人数は公開されていないが、例年修士課程入学者約1,600人の内3割が、国内の他校出身と推計される。

XからX+10年度に、筆者らが主カウンセラーとして担当した事例は、2人合わせて319事例であり、そのうち本稿で対象とした他校出身学生は、49事例(15.4%)

* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

であった。

他校出身学生の実態を把握するために、(1) 性別、(2) 初回時学年、(3) 初回来談月、(4) 出身校、(5) 居住形態、(6) 来談経路、(7) 相談期間、(8) 相談回数、(9) 転帰、(10) コンサルテーション、(11) 入学理由、(12) 相談内容、(13) 主訴の13項目について分析した。主訴に関しては、相談申込票に記入された文章または初回の訴えの内容（ことば）をとりあげて分類した。

3. 結果と考察

分類の結果は以下の通りである。

(1) 性別 (図1)

男女比はほぼ3対1であった。A大学の女子学生は学生全体の約14%、他校出身学生の男女の内訳は不明であるが、他校出身の女子学生の来談は少なくないと言えよう。A大学に於いては、女子であるだけで少数派であるが、それに加えて他校出身となると極めて稀有な存在で、相談相手が見つかりにくいことが推察される。

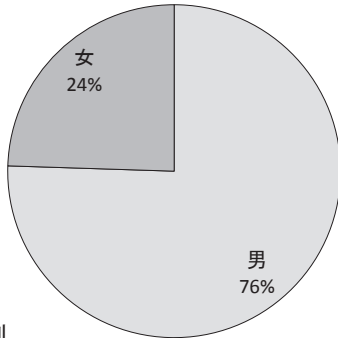


図1. 性別

(2) 初回時学年 (図2)

修士 (Mと表記) 1年と2年が4割ずつ、学部生 (Bと表記) が1割、博士 (Dと表記)・その他が合わせて1割であった。学部生には高専からの編入生の他、他大学を卒業後に入学してきた者を含む。また、他校出身学生の「その他」は研究生やポスドクであり、教職員は含まれていない。

8割が修士課程の学生であり、かつM1とM2がほぼ同じくらいという点が興味深い。大学院入学期の新しい環境への不適応の問題（入ってみたものついていけない、合わない等）と同程度に、卒業期の不安（修論が書けるか、就職できるか等）が、来談の契機になっていると考えられる。他校出身学生は修士課程のわずか2年間に、新しい環境に適応しながら進路を決定し、研究も修めなくてはならないというハードワークが求められる。

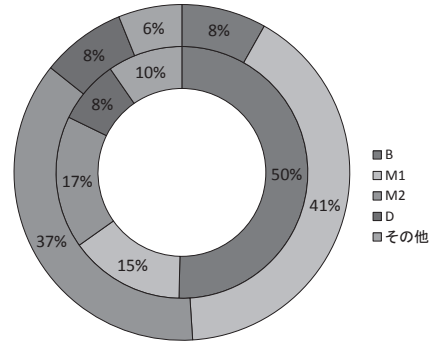


図2. 初回時学年 (外円：他校出身、内円：他校出身以外)

(3) 初回来談月 (図3)

4月、7・8月、10月、1月の4つのピークが見て取れた。それぞれ入学・進級、中間発表、後期開始・秋入学、修論提出の時期に一致していると言えよう。

ただし4月は、7人中5人がM2の4月（進級して就活も本格化する時期）に初来談している。秋入学の日本人学生はほとんどいないので、大学院に入学してすぐに来談しているのではなく、しばらくやってみたが、どうしても立ち行かなくなってきて来談するという様子うかがわれる。

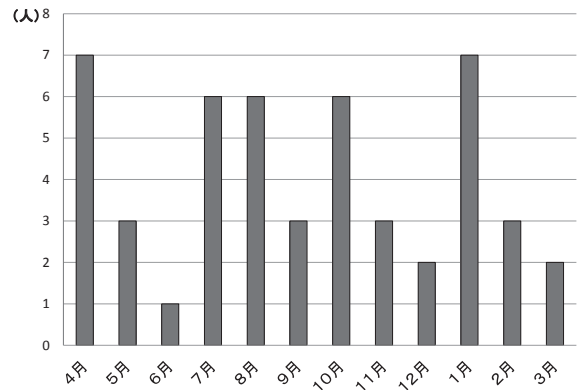


図3. 初回来談月

(4) 出身校 (図4)

出身は都内私立大が4割で最も多く、国公立を合わせて都内の大学が半数を超えるが、地方大学も3割いた。高専出身は学部編入・大学院からの入学を合わせても1割弱だった。大学院進学に際し、広域から受験してきていることがうかがわれる。

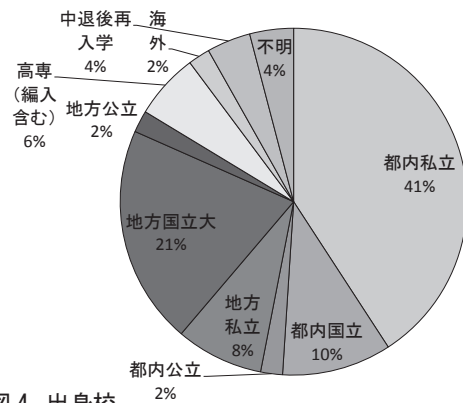


図4. 出身校

(5) 居住形態 (図 5)

独り暮らしをしている者と、実家・自宅および実家ではないが家族・親戚と同居している者は、半々であった。

学内に頼れる知り合いが少ない他校出身学生にとって、家族からのサポートはありがたいであろう。しかし、家族の視線や期待がかえってプレッシャーになって、つらくても弱音を吐けずに、一人で悩みを抱え込んでいくケースも見受けられた。

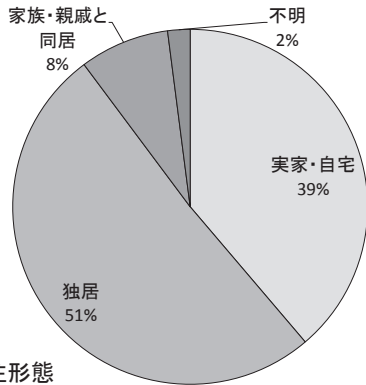


図 5. 居住形態

(6) 来談経路 (図 6)

8割近くが自発的に来談していた。なお、本稿の自発再来とは、過去に他のカウンセラーと話した経験があるが、来談の間隔が開き、あらためて再来して筆者らが担当となったものを指す。身近に相談できる相手が少なく、何事も自発的に動かないことには始まらない状況が推察される。

特にA大学の学生相談は、教職員に浸透・周知されており、学生についての教職員からの相談（コンサルテーション）や、教員に連れられてカウンセリングに訪れるケースも少なくない。それを鑑みると、教員の勧めによる来談が1割に満たないのは特徴的である。他校出身学生と教員との関係性が希薄であったり、うまくいっていなかったり、もしくは、教員の目には彼らが困っているようには映らないという可能性が考えられる。

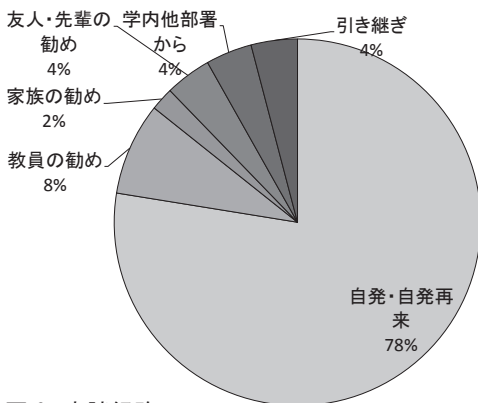


図 6. 来談経路

(7) 相談期間 (図 7)

単発すなわち一度来談しただけで終わった事例が2割弱、1ヶ月以内に終わった事例も2割あり、3ヶ月以内

を加えると約半数となった。

学生相談のカウンセラーに持ち込まれる相談は、ちょっとしたアドバイスや情報提供で済むような内容であることは稀である。もちろん個々のカウンセラーのオリエンテーションやスタンスによって、対応の仕方に違いはあるが、少なくとも初回は、「いっしょに考えていきませんか?」「どうなったか、様子を教えてくださいね」等と言って、カウンセラー側からは相談の継続を促すことが多い。よって他校出身学生の相談は、かなり短い期間で終わっており、特に単発相談が多いという印象がある。

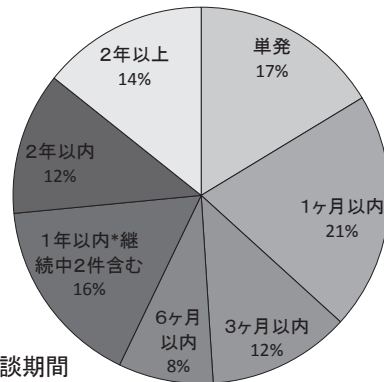


図 7. 相談期間

(8) 相談回数 (図 8)

上述の相談期間と同様に、1回のみが2割弱、2~4回が2割であった。5~10回の2割は、相談期間では3ヶ月以上6ヶ月未満に相当すると言えよう。

しかし、他校出身以外と比較してみると、他校出身以外の半数が4回以内で終わっているの、他校出身学生の相談回数が少ないとは言いがたい。ただし、なんといっても他校出身以外は学部での来談が半数を占める(図2)。一般的に学生相談では、進路修学と同程度に対人関係の相談が多いとされるので、相談内容に応じて、相談回数も異なる様相を呈するのかもしれない。また本稿では、他校出身以外には学部・大学院両方の留学生を含んでいる。彼らとは言葉が障壁となって、カウンセリングが継続しにくくなる可能性が否めない。またA大学では、教職員本人や研究員(その他に分類)からの相談にも対応しているが、基本的には学生優先なので、彼らの相談は比較的短期的である。

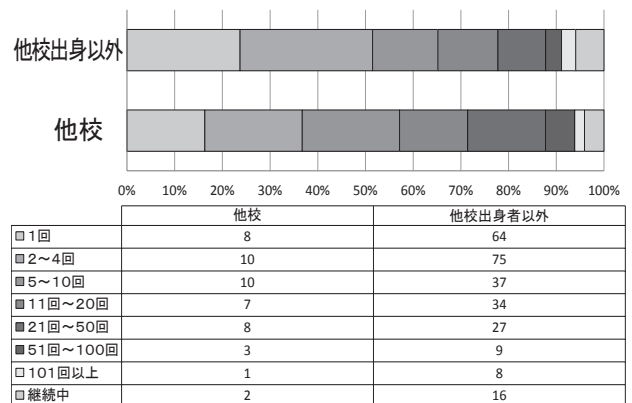


図 8. 相談回数 (実績)

(9) 転帰 (図 9)

カウンセリングの転帰としては、問題の解決や来談者が納得する形で終結した事例が3割、一区切りついたところで特に次回の予約をせずに、「何かあればまた来ます」と、オープンエンドの形で終わる事例が1割あるが、半数は中断している。

さらに上述の(7) 期間 (8) 回数と合わせると、中断事例の半数は、単発 (6 事例) やごく短期間 (2~4 回) に終わっていた。逆から見ると、4 回以内に終わった事例の3分の2は中断し、残り3分の1が終結ないしはオープンエンドになっている。

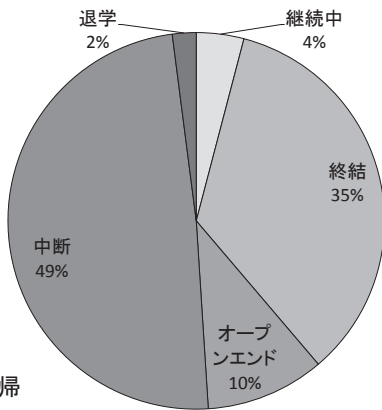


図 9. 転帰

(10) コンサルテーション (図 10)

コンサルテーションの相手は、一人の学生に関し、複数の相手とコンサルテーションを行なった場合は、それぞれにカウントした。7割 (34 事例) でコンサルテーションを行なっておらず、教職員との連携も保護者とのそれも、かなり少ないと言えよう。

(6) 来談経路で述べたように、A 大学では教職員と連携をはかることが多いので、コンサルテーションの少なさは他校出身学生事例の特徴の一つと考える。一方、事例の2割 (11 事例) では学内外の医師 (Dr と表記) と連携をはかっていた。(7) 期間 (8) 回数 (9) 転帰と合わせて考えると、教職員や保護者等の関係者と連携をはかる以前に、ごく短い期間で相談が終わってしまうケースが少なくなく、一方では初期の段階から医療との連携の必要性が感じられる事例が相当数あるということになる。対応に急を要するような事例の深刻性がうかがわれることに留意したい。

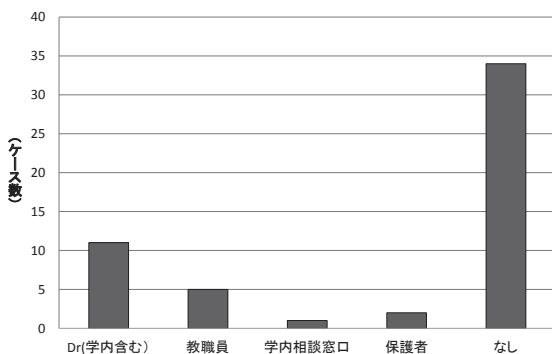


図 10. コンサルテーション

(11) 入学理由 (図 11)

他校から A 大学に入学してきた理由については、カウンセラーからあえて尋ねている訳ではない。ことさらに理由を語っていないだけでも、ケース経過中に、入学の理由や動機についてのなんらかのコメントがあったものを分類した。

半数は不明であるが、理由が明らかなもののほとんどは、自身の向上・ステップアップのために、専門性を深め、そのうえでより良い就職や研究を目指したいということであった。中には、自分のやりたいことのために、それまでに学んできたこととは異なる分野へ転向してきた者もいた。

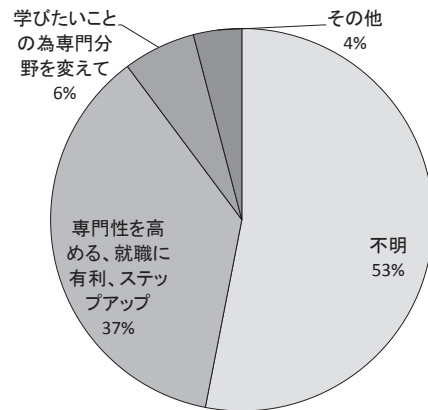


図 11. 入学理由

(12) 相談内容 (図 12)

ケース経過全体を通じた主な相談内容としては、進路修学に関するものが半数で最も多く、対人関係が4分の1、心身健康、心理性格の順であった。

上述したように、強い意志を持ち、たくさんの努力の後にわざわざ他校から入学してきたにもかかわらず、進路や修学に行き詰まってしまうと、その無念さや傷つきは深いであろうことが推察される。

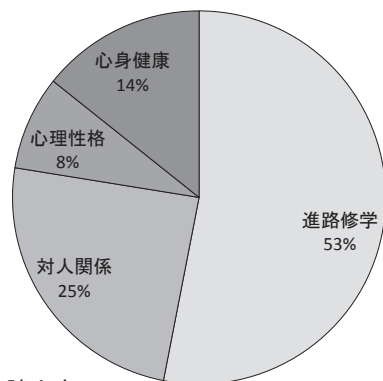


図 12. 相談内容

(13) 主訴

相談申込票に記入された文章または初回の訴えの内容 (ことば) を、1. 来談のきっかけ、2. 初回時の状態、3. 来談の目的・今後の希望、の3つの観点から整理・分類した。言い換えをしたり複数の事柄を述べたりし

ている場合は、それぞれにカウントした。

(13-1) きっかけ (表1)

来談のきっかけとしては、「研究についていけない」「中間発表・論文の行き詰まり」「研究テーマが合わない・希望と異なる」「修論が書けずに留年した」等、『研究のつまずき』に関する問題が最も多かった(計13人)。

次いで、「指導教員(Profと表記)とうまくいかない」「研究室のメンバーとの関係」「研究室の環境・雰囲気合わない」等、『研究室の人間関係』に関する問題も多かった(計11人)。

他には「体調不良」「受診したところ医師に勧められて」の『健康状態』に関する問題(計5人)、「就活がうまくいかない」の『就活』に関する問題(5人)、「復学に向けて」「うまくいかないが増えている」「通学が大変」等の『学生生活上の問題』(計4人)、その他では「失恋・異性関係」「バイト先の人間関係」「隣人トラブル」等、『学外の人間関係』の問題(計4人)であった。

半数近い者が、研究への不適応を主訴としており、研究・学力レベルについていけないと、自身の能力不足・劣等感を痛感したことが来談のきっかけとなっていることがわかる。研究室の人間関係についても、指導教員の、多くの場合は励ましのつもり「もう少しがんばらないとね」や「急がないと間に合わなくなるよ」等の言葉かけが、自分にだけ評価が低いように感じられたり、かえってプレッシャーになったりしやすいようである。また、研究室メンバーとの関係も、新しい環境になじめないだけでなく、周囲は自主的・積極的にどんどん研究を進めているように見えて、引け目を感じたり迷惑をかけたりしているように感じたりして、自己肯定感低下に拍車をかけてしまっていることがうかがわれた。

表1. 来談のきっかけ

来談のきっかけ			
研究のつまずき	研究についていけない	6	13
	中間発表・論文の行き詰まり	5	
	研究テーマが合わない・希望と異なる	1	
	留年	1	
研究室の人間関係	Profとうまくいかない	7	11
	研究室メンバーとの関係	2	
	研究室の環境が合わない	2	
健康状態	体調不良	3	5
	Drに勧められて	2	
就活	就活	5	5
学生生活上の問題	復学に向けて	2	4
	うまくいかないが増えている	1	
	通学が大変	1	
その他(学外の人間関係)	失恋・異性関係	2	4
	バイト先の人間関係	1	
	隣人トラブル	1	

(13-2) 状態像 (表2)

初回来談時の状態としては、多い順に列記すると、「やる気が出ない」「しなければいけないことになかなか取りかかれない・着手できない」「面倒くさい」等の全般的な『意欲低下』(計12人)、「気分の落ち込み・憂うつ・うつ状態」「生きる希望を失った・将来に希望が持てな

い」「虚無感」等の『抑うつ』(計9人)、「研究への興味・モチベーションの低下」「研究を続けるのがつらい・研究室がつらい」「学生生活を送っていく自信がない」等の『研究の自信喪失』(計8人)、「涙が止まらない・悲しくなる」「楽しくない」「イライラ」「不安定」「惨めな気持ち」等の『情緒不安定』(計7人)、「不安」「心が葛藤・いろいろ悩む」「やりたいことがわからない」等の諸々の『不安・葛藤』(計6人)、「周囲を気にする」「嫌なことを言われたことを思い出す」「嫉妬心が強い」等の『対人緊張』(計5人)、「何も手につかない」「集中力がなくなった」等の『集中力低下』(計3人)、「強迫性障害」「ストレス耐性が弱い」「時間がない」等の『焦燥感』(計3人)のように、多様な精神症状の訴えがほぼ全員からあった。

さらには、「眠れない」「食欲不振・吐き気」「動悸」「過呼吸」「全身の疼痛」等の『身体症状』(計12人)も見られた。

その他、「登校できない」「外出できない」等の『不登校』状態に陥っている者(計7人)、「親子関係が悪い」「嫌味を言ってしまう」等の『対人関係の不調』をきたしている者(計2人)もあり、これらは日常生活・行動面に支障が出ている状態と考えられる。

上記の状態像は、精神症状のみならず身体症状や行動上の問題も含めて、総じて抑うつ状態の指標とされるものである。程度の差こそあれ、カウンセリングに訪れる他校出身学生は、ほぼ全員が来談時は抑うつ状態にあると言っても過言ではなさそうである。

表2. 来談時の状態像

状態像			
身体症状	眠れない	5	12
	食欲不振・吐き気	4	
	動悸	1	
	過呼吸	1	
	全身の疼痛	1	
意欲低下	やる気が出ない	9	12
	しなければいけないことになかなか取りかかれない・着手できない	2	
	面倒くさい	1	
抑うつ	気分の落ち込み・憂うつ・うつ状態	5	9
	生きる希望を失った・将来に希望が持てない	3	
研究の自信喪失	虚無感	1	8
	研究への興味・モチベーションの低下	4	
	研究を続けるのがつらい・研究室がつらい	3	
情緒不安定	学生生活を送っていく自信がない	1	7
	涙が止まらない・悲しくなる	3	
	楽しくない	1	
	イライラ	1	
	不安定	1	
不安・葛藤	惨めな気持ち	1	6
	不安	3	
	心が葛藤・いろいろ悩む	2	
対人緊張	やりたいことがわからない	1	5
	周囲を気にする	3	
	嫌なことを言われたことを思い出す	1	
集中力低下	嫉妬心が強い	1	3
	何も手につかない	2	
強迫・焦燥感	集中力がなくなった	1	3
	強迫性障害	1	
	ストレス耐性が弱い	1	
不登校	時間がない	1	7
	登校できない	6	
	外出できない	1	
対人関係の不調	親子関係が悪い	1	2
	嫌味を言ってしまう	1	

(13-3) 来談目的 (表3)

来談した目的としては、「進路変更すべきか」「休・退学を悩む」等の『進路の検討』(計7人)が一番多いが、次いで「自分を変えたい」「人に率直に言えるようになりたい」「衰えた力を取り戻したい」等の明確で『能動的な自己変容』を望む者(計4人)が、「どうにかしたい」「楽しめるようになりたい」等の『漠然とした期待・願望』(計3人)と同程度に見られた。

その他、「夜ゆっくり眠れる方法を教えてほしい」「朝起きられるようになりたい」「ストレス対処法を知りたい」等の『具体的な方法』を求めての来談(計3人)や、「生活史を見直すように言われた」「受診すべきか」等の『医療の必要性』の判断(計2人)や、先に受診し医師から勧められての来談もあり、率直な「話し相手がほしい(孤独感をやわらげたい)」というものもあった。

通常の学生相談では、初回来談時に「どういったことで来談されましたか?」「どうしていきたいと思っていますか?」と確認することはあるが、カウンセリングへの期待や目的が漠然としていて、本人もどうしたらいいのか、どうなりたいたのかよくわからないので、「いっしょに考えていきましょう」ということにして、相談を継続していくことが一般的であるように思う。つまり、来談目的を意識していたとしても、自身や周囲が変わることへの『期待・願望』のレベルで語られる印象がある。

それに対して他校出身学生は、自分で申込票に記入して来ており、初回から目的が明確化している。さらには、『能動的な自己変容』のような自力で何とかしたいという表現や、単刀直入に『具体的な方法』を教えてほしいという要望を示すのは、彼らの特徴であるように思われる。

表3. 来談の目的

来談目的			
進路の検討	進路変更すべきか	5	7
	休・退学を悩む	2	
能動的な自己変容	自分を変えたい	2	4
	人に率直に言えるようになりたい	1	
	衰えた力を取り戻したい	1	
漠然とした期待・願望	どうにかしたい	2	3
	楽しめるようになりたい	1	
具体的な方法	夜ゆっくり眠れる方法を教えてほしい	1	3
	朝起きられるようになりたい	1	
	ストレス対処法を知りたい	1	
医療の必要性	生活史を見直すように言われた	1	2
	受診すべきか	1	
話し相手	話し相手がほしい(孤独感をやわらげたい)	1	1

4. 総合的考察

4-1. 他校出身学生の不適応の様相

これらの結果から、他校出身学生が呈する不適応について仮説を立ててみたい。

本稿の動機は、学生相談の場で出会う他校出身学生は、数はさほど多くないのに、何故印象深いのか、ということであった。彼らには特有の“時間感覚”があるのではなかろうか。言い換えると、非常に“性急な”印象を抱くのである。彼らの主訴に、そのことが如実に表れているように思われる。

他校出身学生の来談目的は、妙にはっきりしているように感じられる。それは、彼らの元来備えている優れた知性や行動力、自立性、積極性、向上心、社交性等に基づくものであることは間違いない。実際、学部や高専の時には成績優秀者として表彰されたという学生も少なくない。出身校の教員や研究室の仲間に応援されながら、学びを深めるために、努力してA大学の編入試験や大学院入試を突破してきた者がほとんどである。

しかし、他校出身学生に特有の性急さは、彼らの“切迫感”“切実感”に因るところが大きいと考える。入学理由で見てきたように、他校出身学生の多くは、研究が続けたくて、もしくは将来研究職に就きたくて入学してきており、「皆が進学するので」という内部進学生とは、目的意識や真剣さの度合いが異なっている。それにもかかわらず、せっかく入った研究室で、研究についていけないという劣等感と挫折感を味わうことは、彼らの自尊心を甚だしく傷つけるであろうことは想像に難くない。さらには、親に学費の負担をかけ続けていることに負い目を感じていたり、ステップアップしたことに過剰に期待されたりして、行き詰まっても親に相談しづらく、引くに引けなくなってしまう場合もある。彼らの思い描いていた将来への展望・見通しが崩壊してしまったと言っても過言ではないのである。

このような傷つきからの回復は容易ではないであろう。彼らは一様に抑うつ状態を呈していた。それでも彼らには時間がない。修士課程の2年間で、新しい環境の人間関係ややり方になじみ、内部進学生と同等の研究に必要な基礎知識を修得して追いつき、就活もしなくてはならない。否応なく余裕のない、のんびきならない状況に追い込まれてしまう。

加えて、彼らにはサポート資源が少ない。新しい研究室の教員やメンバーには、引け目があって信頼関係が築きにくい。かといって、研究室以外に、サークル等の居場所や仲間関係がある訳ではない。出身校の友人とも離れたことで連絡がとりにくくなったり、親にも弱音を吐けなかったりする場合も少なくない。そもそも自分で選んだ道なので、自分でがんばるしかないと思っている。彼らは他者のサポートを期待できない状況にあり、かつ期待もしていないのである。

それゆえに、カウンセリングの目的が、単刀直入の自力解決志向となるのであろう。彼らは強い切実感・切迫感をもって、一刻も早く、自分で何とかせねばと考える来談する。いきおい、カウンセリングやカウンセラーに対しても、役に立つか否かを見極め、相談を継続するかどうか、やや性急に判断を下すことになる。それが、相談期間の短さや回数の少なさに反映されていると考

える。

4-2. 他校出身学生に対する支援

このように見ていくと、他校出身学生のニーズは、そもそもカウンセリングやカウンセラーのかまえとは合致しにくい可能性がある。一般的にカウンセリングは、クライアント（来談者）の話をじっくり傾聴し、クライアントの心理に受容共感しながら、いっしょに考えることで、クライアントの心理的成長を促すものとされる。切迫している彼らには、カウンセリングはまどろっこしく具体性が乏しいように感じられるのかもしれない。

他校出身学生の多くは、いきなり外部から研究室という狭い閉鎖的な世界に新参者・異端者として放り込まれる。彼らは、自発的意欲的に入学してきた有能な学生に見えるし、研究についていけないのは自分がダメなせいだと自責的になりがちで、不適応感を抱えていてもなかなか訴えられずに、孤独の中でますます自己否定的になっていく。塚本（1990）は、小学校の転校生についての本人・担任・保護者への面接調査で、「転校後6ヶ月を経過した時点でも、前の学校の方が居心地がよいと感じている者が半数以上いて、担任から見た外的適応と、転校生自身の感じる内的適応に差がある」と述べている。大学・大学院生ともなればなおさら、彼らの内面の傷つきは、周囲には気づかれにくいと思われる。

そんな彼らには、大学側が入学前後の早い段階で、新しい環境になじむのに必要な支援や情報を提供すること、またサークルやアルバイト活動の代わりとなるような他者との交流の機会を催すことが、うつに陥るのを防ぐのに有効ではないだろうか。小泉（1986）は小学校での調査から、「転校によって一変した設備・備品などの物理的環境やクラス成員、教師に対する認知や相互交流の活発化には、学校生活における実際の接触が必要」としている。また、小西・稲垣（2010, 2012）や漆澤ら（2012）は、新しい環境へのスムーズな適応過程には担任とのラポール形成と友達関係の広がりが見られたとしているが、指導教員をキーパーソンとし、他者とつながることのできる支援体制整備が求められる。

そこでいくつかのアイデアを提案したい。例えば、学部の新入生向けのような学内の施設や支援窓口を巡るガイダンスは、新しい環境への敷居を低くするであろう。教養講座や専攻横断型の基礎ゼミは、必要な基礎知識を補ったり学内の行動範囲を広げたりする一助となろう。メンタルヘルスや対人関係・コミュニケーション力を高めるためのセミナーや体験型ワークショップは、所属研究室以外の学生と知り合う機会になったり将来の就活に役立ったりするのではないか。

また、他校出身学生の集いや様々な交流イベントの企画の他、近年各大学で増えてきているピア・サポート活動に他校出身学生の先輩に協力してもらうこと等も、他校出身学生のみならず内部進学生にとっても対人援助スキルの向上に有意義な機会になると考える。社会的スキルは、受け入れる側の自己効力感向上にも効果

があるとされている（高橋ら、2014）。

このような支援の方策は、留学生・帰国子女・在留外国人・社会人入学・障害学生・性的マイノリティ等への支援にも通じるであろう。李・佐野（2009）は、言語や文化の異なるマイノリティの適応と支援のあり方について、海外の論文を整理し、「マイノリティへの教育支援と研究は、多文化共生社会を目指している日本にとって重要な研究課題になる」としている。

杉原（2015）は、「現状として我が国では外国人児童生徒に対して日本の学校への『適応』を求める傾向が強く、多様性は奪われてしまっている。こうした現状を改善するためには、多様性を活かし、多様な子どもたちの存在を教室の財産とみなし、『差異』を活用した教育を展開することのできる教員の存在が欠かせない」と述べている。坪谷（2015）も高校での外国人生徒に関する調査から、「『日本にいるのだから日本語力さえ向上させればよい』という教員たちの認識が強くなり過ぎると、無意識のうちに『日本語モノリンガリズム』を推し進める流れを作ってしまう懸念」があり、「外国につながる子どもを包摂しうる学力観や学力評価のあり方をいま一度検討する必要がある」としている。

大学に於いても同様であり、他校出身学生を含め、様々なマイノリティを、大学・研究室に異文化の新しい風・刺激を持ち込んでくれる者として、同化ではなく共生する方向に、受け入れ側の意識を変えていくと共に、マイノリティ本人の努力を求めるだけでなく、「君たちは少数だがひとりじゃない。自助努力だけでなくサポートされてよい。」という発信が重要だと思われる。

5. おわりに（課題）

本稿では、A大学に於いて筆者らが担当した他校出身学生の事例を分析対象としたが、学部編入生と院からの入学者との区別や、在来の内部進学生との比較分析は十分ではない。

また理系中心のA大学では、他校から修士課程に入学して早々に（高専からの学部編入の場合も同様）、学生生活のほとんどの時間を所属研究室で過ごし、研究活動にすみやかに従事することを求められるが、他校出身であっても、大学や学部（文系か理系か）によって、彼らの適応状態には相違があるかもしれない。

学生相談として実施されているカウンセリングの主目的は、学生たちの学生生活の適応と心理的成長を促進するものであり、どこの大学でも共通していると言ってよい。とは言え、担当者のカウンセリングについての姿勢や個性によって、対応の仕方に偏りが生じるのは避けられないであろう。特に相談の継続に関しては、担当者と学生のマッチングが、相談回数や期間等に反映されやすいと思われる。

これらの課題を踏まえ、今後は全国の大学に調査を広げたり、細やかに経過を見ていったりする研究が期待される。

【参考文献】

- 植村善太郎 2003 大学3年次編入学生の適応感と対人関係—編入学生と在来学生に対する面接調査からの検討— 日本教育心理学会発表論文集 45、147
- 漆澤恭子・阿子島茂美・伊澤正雄 2012 教育的ニーズのある児童生徒の新しい環境への適応支援—転学・進学・進級時への支援— 植草学園短期大学研究紀要 第13号、25—31
- 北村正直 1990 北海道大学における高専編入学生の教育 日本工業教育協会誌 第38巻第6号、3—7
- 小泉令三 1986 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究 第34巻、289—296
- 小西一博・稲垣応顕 2010 転校を伴う外国人（ブラジル人）児童の学校適応に関する事例研究—教師とのラポール形成に焦点を当てて— 上越教育大学研究紀要 第29号、33—43
- 小西一博・稲垣応顕 2012 転校を伴う外国人（ブラジル人）児童の学校適応に関する事例研究（2）—友達関係の広がり—に焦点を当てて— 上越教育大学研究紀要 第31号、19—28
- 杉野英太郎・大前義弘・高橋参吉・中馬義孝・野々村昇・畠山信敏・松本俊郎・宮本皓生 1985 高専から大学への編入学に関する調査 日本工業教育協会誌 第33巻第3号、52—57
- 杉原薫 2015 多文化社会において求められる教員養成に関する予備的考察 鹿児島大学教育学部研究紀要、教育科学編 67、91—100
- 高橋史・小関俊祐・小関真実 2014 児童に対する社会的スキル訓練による転校性受け入れに関する自己効力感向上 ストレス科学研究 29、77—83
- 塚本美恵子 1990 新しい環境への適応—適応の概念と転校生の学校適応に関する調査報告（1）— 国際基督教大学学報 I - A, 教育研究 32、111—133
- 堤教彰・芦高勇氣・石坂洋輔・嶋田博行 2008 他大学出身学生・社会人学生の研究室受け入れ後の入門学習として e-Learning を用いた教育実践 日本教育工学会論文誌 32、1—4
- 坪谷美欧子 2015 外国につながる生徒による日本の高校での学びの意味づけと「成功」の変容—中国人およびフィリピン人生徒を中心に— 三田社会学 第20号、6—21
- 富山弘幸 1996 大学編入者から見た高専に対する—考察— 高等専門学校の教育と問題：日本高専学会誌 1(2)、45—48
- 文部科学省 2016 平成27年度学校基本調査 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afie/fieldfile/2015/12/25/1365622_3_1.pdf
- 李原翔・佐野秀樹 2009 マイノリティの学業達成・文化変容およびカウンセリングの役割に関する海外研究の動向—適応要因と教育支援のキーワードを通して— 東京学芸大学紀要．総合教育科学系 60、193—202